

論文

三井寺周辺における在地信仰と霊験譚の伝播

高倉 瑞穂

〔抄録〕

現在に伝わる身代わり説話はその対象となる仏菩薩を信仰する多くの人々に影響を与えてきた。その中で病に伏した高僧を憐れみ不動が身代わりとなる「泣不動説話」も諸作品に摂取され、多くの人々が知るものとなる。こうした諸作品それぞれに目を向けると、三井寺周辺で成立したものと巷間で広まったものでは僧や不動霊験の描かれ方や記述の方法に差異がある。本論は三井寺の〈内〉なる作品と〈外〉なる作品を精査し、高僧の描かれ方に

着目することで、三井寺を中心とした在地信仰の発展の可能性を探りつつ、それぞれの系統としての不動縁起が如何にして発展し、後代に伝播していったのかについての一考察を加えるものである。

キーワード 身代わり説話、不動霊験、三井寺

はじめに

身代わり説話最大の要素は、日々の功德の結果得られた功験として実際に仏菩薩に表出される損傷など可視的な〈痕跡〉である。仏教説話として信仰者に語られる時、多くは「生命の危機Ⅱ死」という最重要事項から脱却できる点において、こうした〈痕跡〉が身代わり説話が語られる本質の一つであることは間違いないだろう。身代わり説話の

根底には、浄土教の隆盛や末法の世の到来と当代の人々の深い信仰心がある。これら死に直面する者と、それを救済する仏菩薩の利益を描く説話は、当時の倫理観や思想面という角度から見ても非常に興味深い。本論で取り上げる泣不動にまつわる一連の説話（以降、泣不動説話と書く）もその例外にない。¹⁾

多くの作品に摂取され、それ自体が著名な作品だったとされる泣不動説話は、伝播されていく場や情況によって内容が異なるという、か

なり広がりのある展開を見せている。こうした性格から、現在まで原典を探るものや展開や再文脈化などさまざまな角度から多くの研究者たちの研究も行われてきた。だが一方で残念なことに、そのような性格であるからこそ、散出する研究成果を把握しづらいのも現実である。泣不動説話は今一度大きく俯瞰しつつ整理してみるべきではなからうか。背景にある信仰の諸相は説話テキストの伝播問題に非常に密接に関わってくる。

また、現在に残る三井寺周辺の書物の内容記載は非常に特異である。『今昔物語集』に中心人物として据えられる安倍晴明とともに泰山府君や地藏との関連し、展開していく泣不動説話において、それらが語られる「場」である三井寺周辺に根付いた信仰を明解にすることは、こうしたテキストの精査・検討の上でも不可欠である。既に三井寺の〈内〉〈外〉を二系統に分類し、それによる本文の方向性を示した研究は行われていたが、内容を精査していくと不動靈験を表す態度や方法もテキストにより大きな差異が生じており、目的による説話伝播の意識が介在していることが明らかになる。本論は三々五々に存在する現段階での泣不動説話研究の位置付けを図るとともに、とりわけ泣不動説話や周辺文書類を用いながら信仰に裏付けられる三井寺周辺での説話伝播の過程や記述意識への一考察を加えるものである。

一 泣不動説話の研究動向とその課題

表面的な印象と、それに相反する行為が生む説話はとりわけそれを受容する信仰者たちに強力な靈験を印象づけることになる。不動が

「涙を流す」という行為をもつて功德を与える様子は、信仰者にとって絶大なる効果があったと容易に想像されよう。泣不動説話は、平安末期から中世を経て、非常に大きな発展をもつて後世に伝えられた。ここではまずそれら泣不動説話類と先行研究を整理しておく。

生成の基盤となったとされる『今昔物語集』（以降『今昔』と記す）を始め、泣不動説話を収集する最古のテキストとされる『打聞集』、その後『宝物集』、『発心集』、『元亨釈書』、『三国伝記』へと繋がる説話や史書、また『曾我物語』といった軍記物語、『とはずがたり』といった日記文学、そして『園城寺伝記』『寺門伝記補録』など三井寺関係文書にもそれらは散見する。中世期には謡曲にも取られるなど、本説話は人々の身近な存在であった。^②しかし、これらはそれぞれ内容を一にせず、『今昔』には師である智興、そしてその弟子証空の名が欠字になっているばかりでなく、不動明王自体が出てこない。さらに、『宝物集』、『発心集』等諸本による記述の差違を逐一検討せねばならないなど、構成として相当に大きな揺れが確認される。^③特に『宝物集』については、未だ不透明さが残る諸本の位置を探らねばならないという作品的問題とともに、本説話など個々の説話としての細部^{ディテール}についても再検討が俟たれている。

さて、泣不動説話については諸本間の差異をもとにした成立や展開、背景を探る先行研究が存在し、歴史的な展開の位相についてはおおよそ明るくなってきたと言える。その一方で、築瀬一雄氏がそれぞれの説話の構成について検討されたことで源流とみなされる『今昔』をはじめ、泣不動の原形となるものが後世に伝播した事情、その変容^④

と書承関係が個別に論ぜられており、泣不動説話を在地信仰という視点から見た総合的な位置付けをする必要があるという課題が残されている。資料の精査をしていくと、三井寺内部での不動信仰にはその内容に時代や情況による差異が生じていることが確認され、こうした寺内での信仰とともに、説話類に見られる外部への伝播、流布されていた背景についても検討が必要である。本論は先行研究を根底に今一度資料の精査をし、さらにその中で民衆への信仰とは一線を画した三井寺における信仰の一形態を考えうる余地を指摘し、泣不動説話のいかなる発生・発展があったのかという視点をもとに論を進めていく。

まず、泣不動説話の梗概を示したい。先述したように、泣不動説話には諸本により細部については内容を異にするが、全体の骨格としては、〈重病であった師の身代わりを申し出〉、その〈移された病〉のため苦しんでいた弟子が念じていた〈不動明王に祈ると不動が涙を流し〉、不動に再び病が移され弟子の僧は助かる、というものである。常に不動を念じていた証空という若い僧が、不動の身代わりという奇跡をもって命を救われたという靈験譚となっている。へに示したものが、諸本に見られる差異のない、いわゆる「骨格」部分とされるものである。諸本間における記述の有無があるが、この師である僧が「三井寺常住院僧智興」、弟子僧が「証空」、そして病を移した者が「安倍晴明」であることは注目すべき点である。

この泣不動説話は、後代様々な書物に受容されながら展開されていく。それによる成立や展開については、南里みち子氏が、三井寺関係の書として泣不動説話が採録された最も古い例として、『雑談鈔』を

中心にその展開を述べられている。泣不動説話を考える上で「汝は師にかはる、我は汝にかはらん」という不動の言葉が伝承者たちの興味の中心となりつつ、それを骨格とした不動の靈験譚がその後改編されていったという指摘は、説話変容を考える上で極めて重要な論点といえる⁵⁾。また、『今昔』所収話について、当該説話で語られる陰陽道的要素が、泣不動説話が語り継がれる根底に存在するのではないかと指摘される。『今昔』が安倍晴明を登場させ、息災延命を祈願する泰山府君祭を用いており、この点と死からの救済を中心に据える泣不動説話との関係性をも検討する余地がある。

これに加えて、中前正志氏は近年まとめられた著書と合わせ、「涙」を中心とした本説話の全体像を明らかにした研究がある。中前氏是不動の「涙」の存在および時機に注目し、それが不動の発する言葉の前後いずれかで、「A」・「B」二つの系統に分け、不動の涙の意味に迫る。

一つは、三井寺の内部あるいは近辺では、ほぼ一貫して「A」系統の病悩苦痛の涙との理解が行われていた、ということ。今一つは、「B」系統、感動哀憐の涙の方は、三井寺の外側で行われていた。(中略)泣不動説話というものが、三井寺の内部・近辺でもそもも成立し、特に初期の時点ではそこを中心にして伝承されていた、というようなことが推測されてこよう。開基智証大師円珍が感得したという有名な黄不動などによって「不動の寺」とも称される、不動信仰の一大メッカ・三井寺は、泣不動の発祥・伝承の場として誠に相応しいとも言えよう。(傍線筆者)

傍線で示したように説話毎に「病悩苦痛の涙」、「感動哀憐の涙」として受容されていたと両系統の話の位置付ける⁶。つまり、『発心集』、『宝物集』、『三国伝記』はともに「三井の外なる説話」であり、その内容は民衆にとって直接的に心に訴えやすい構成であるといえる。一方『園城寺伝記』、『寺門伝記補録』など三井の〈内〉なる説話には、身代わりの証拠としての「涙」の存在に重点が置かれ、粛々とした不動利益の説話の展開が形成されている。それはあくまで三井寺として、自社の不動利益を前面に推す不動縁起という性格を見せていたといえよう。そして当初泣不動説話が、「三井寺の内部・近辺でそもそも成立し、特に初期の時点ではそこを中心にして伝承されていた」とし、特に「病悩苦痛の涙」の説話とされるものには三井寺関係の文書が多く、さらに、説話が三井寺の〈内〉、もしくは〈外〉という「場」の違いによって、変容、伝播されて行ったということを併せて指摘される。確かに、このような身代わり説話は、例えば仏師に代わって弓で射られた観音の胸に傷が残るといった穴太寺観音靈驗譚や、瀕死の僧に施しを与え、腿が切り取られていた成相寺観音靈驗に例を挙げられるように、身代わりの証拠として本尊に何かしらの痕跡が残ることが利益の可視的な証拠となり、それが靈驗譚となつて一般的に流布されていく。三井寺においては不動靈驗を語る上で、不動が「泣く」という特異な状態を身代わりの証拠として表出し、靈驗譚となつていったはずだ。ただ一方で、涙を流す時機をどの場面に表現するのかというところが、中世説話において変容される過程として、その伝播者たちの意識の中にそもそも介在していたのだろうか。こうした在地信仰と

靈驗譚の伝播の関係性の証明は、泣不動説話の変容の過程を位置付ける上で大きな命題となる。泣不動説話では受容者における解釈の違いもさることながら、不動靈驗自体に重きを置くのか、それとも高僧の存在に重きを置くのか、などといった語る側の説話の構成要素も大きな問題となるのである。

二 三井寺周辺の泣不動説話の拡大と証空の描写

三井寺関係の文書を収めた『園城寺伝記』五之六には、泣不動説話である「泣不動事」と題された説話の直後に「一依不動靈湧出甘泉事」が所収されている。これは三井寺南院である花王院にいた覚助という僧が証空の泣不動像を持つており、花王院の水の出が悪いことを憂えた覚助が不動に祈ると清水が湧きだしたというものである。

『園城寺伝記』は先述したように三井寺内部の文書類である。そのため、中前氏の分類方法を参考とするならば「汝既代師範我当代行者一持秘密呪生生二加護即画像明王悲涙余眼病氣遍体也」は中前氏の言うところの「病悩苦痛の涙」であり、陰陽道の効果と不動の効驗に師弟ともに讃えるという結びを取っているところを敢えて相違点と指摘する以外は、通常の三井寺内部における展開の一形態としてほぼ相違ない。ところが、この覚助の話は三井寺の外部で語られた作品である『宝物集』、『発心集』、『元亨釈書』、そして『三国伝記』らには全く記述がされない。

また『園城寺伝記』には「後白河院院宣曰漢朝揚詩者蒙日月之哀得庭泉吾朝覺助者依明王之効驗湛法水焉哉」と記述される。この

「揚詩」とは、水を欲す母親に江水の水を遠方から汲みに行っていたが、天の恩恵により庭に水を得たという『孝子伝』に記載のある「姜詩」の誤りであろう。それを踏まえた上で、後白河院の院宣として「吾朝覚助者依明王之効験湛法水焉哉」と記述されるものの、史実として後白河院は覚助の没後の人である。⁷⁾これは証空の泣不動靈験譚が既に後白河院の時代、つまり一二世紀頃には覚助という追加要素を含んで伝わっていた証左となる。また『寺門伝記補録』卷一五には「覚助伝」として、「康平五年二月二十八日補四天王寺別当職僧都嘗帰証空阿闍梨位不動尊花王院地高無水常以為憂一日祈請明王」と日付を添えながら、証空の不動靈験により渇水が治ったことが述べられる。証空の命の身代わりとして効果を発揮した不動明王は、証空の死後、時代を追うにつれ、覚助伝や証空伝承といったものに変容し伝播・展開され、独特な唱導性を発揮する。『発心集』には後日談として、証空の泣不動像がその後、白河御所に伝わり、その像に涙の痕跡が残るという記述もあるが、歴史的に見て所在については不明である。また、この涙の痕跡は先述した身代わり観音靈験等で表出される傷跡とは言うことはできず、同列に並べるのには若干の無理が生じよう。ここには身代わりの証拠として仏の利益の痕跡を靈験譚に残そうとする伝播者達の苦心も伺える。

さらに付加伝承としては覚助伝承にとどまらず、『発心集』や『三國伝記』に記された証空については、証空が空也上人の臂が折れたのを余慶僧正が祈り治したとき、「法器のものなり」と言って証空を皆が奉ったという話も存在し、これについては築瀬一雄氏や南里みち子

氏が検討されている。⁸⁾この空也上人にまつわる伝承は『宇治拾遺物語』や『撰集抄』にも記載がある。だが、これらは説話間に大きな異同もあり、三井寺の外部での伝承においては、証空自身を描く話についても付加要素、および改変要素が存在していることがわかる。三井寺の内なる説話は、身代わりの証明となった涙にとどまらず、追加要素を含んで展開しており、〈内〉〈外〉という問題とともに、説話伝播の諸相も往々にして異なっていることが理解できるのである。

三 泰山府君から不動明王への変形

さて、泣不動説話が取り入れられた作品について明らかに特異なのは『今昔物語集』所収話であろう。『今昔』卷一九―二四には、「代師入太山府君祭都状僧語」と題された話が載せられる。これについて梁瀬氏は『今昔』の位置について、安倍晴明の呪術説話を主として例に出されながら、さらに「身代り説話を接合したような『今昔』所収話のようなものが原流をなす」と述べられる。⁹⁾また南里氏は成立の問題と『日本霊異記』第二四、二五を関連させ、「陰陽師にかかわる身代りの説話は、陰陽師の活動を基盤として成立していたと考えてよいのではなからうか」と、早い例に檜磐嶋の身代わりとして「率川の社のもとの相八卦説」が冥界に連れて行かれるのは、民間陰陽師的存在である相八卦説が、冥界との交渉を行っていたからではないかという指摘もされている。¹⁰⁾こうした説話が陰陽師の活動を基盤として生まれてきたという指摘については肯ける。しかし一方で大三輪社の末社として存在する率川社の説話と同列に並べうるものなのかということや、

二重の身代わり説話として構成される泣不動と同じように「陰陽師活動を基盤」として三井寺が取り込んだと言えるのかにも疑問が生じる。それならば『今昔』の師に代わって泰山府君祭の都状に名前を入れられる僧の話は、いかにして不動の靈験譚へと繋がっていくのだろうか。仮に直接的な伝承関係になくとも、何らかの形で原流の存在を認めるとするならば、三井寺周辺の在地信仰との関わりや周辺信仰の實際を明らかにすることが必要であり、それらを念頭に置かねば展開の過程は把握できない。

『今昔』一九―二四には智興、証空、三井寺のいずれの語も欠字になり、さらに身代わりとなるはずの不動明王は登場の気配すら見せず、代わりに「泰山府君」の名が出ることになる。これが、後の説話では「泰山府君」から「不動明王」へ変わり泣不動説話へと骨格を変えていく。梗概とともに重要な点として以下の四点が挙げられる。

- ・ 病で倒れた僧が弟子の加持祈禱も効果なく、安倍晴明が「泰山府君の祭り」を行い、命の身代わりとなる者を差し出すことで助けることができるという。
 - ・ 高位の僧は誰も名乗りをあげなかったが、もっとも低位僧であった者が身代わりを申し出、弟子の名を都状に書き記し祭祀を行う。
 - ・ 師の僧の病気は徐々に癒え、弟子僧に病が移り死を覚悟するもその時は来ない。
 - ・ 結局病は移らず、のちに晴明が両名が助かることを告げに来る。
- これは泰山府君が哀憐による救済の結果であった。

当該説話は晴明の言葉によって僧の運命が決することとなり、まさに「晴明不在の説話」ではあり得ない。同時に注目すべきは晴明と存在感を發揮するのが泰山府君という存在である。道教神である泰山府君が文中に現れるのは一連の泣不動説話中『今昔』ただひとつであり、「三井の〈外〉なる説話」には出てくることはない。

泰山府君をはじめとする、道教に端を発する信仰が日本文化に触れ、さらに独自の発展をする様子は、坂出祥伸氏が、泰山が中国の五山の中でも筆頭の位置を与えられていたことを述べつつ指摘されている⁽¹⁾。泰山府君とはそうした泰山の神としてそれを神格化させたものであり、人の命、魂魄をつかさどるとともに死者の魂は泰山へと帰るものとされていた。最終的に日本に泰山府君の信仰が伝わり、人間の生死、延命長寿をつかさどる神として崇められるようになった。この泰山府君を祀るものが泰山府君祭であるが、これは陰陽道の最高奥義として死者を蘇らせるための秘術であったという。『小右記』永祚元年二月十一日には、皇太后である藤原詮子が病悩した際、「令勘申尊勝法・太山府君祭日、御修法事□遣天台座主許、御祭□晴明奉仕（□部欠字）」とあるように、密教による尊勝法の修法と陰陽道の泰山府君祭が一緒に行われた例が確認でき、この文においては、泰山府君祭が密教修法よりも効果があったことが指摘される。例えば『今昔』においても「弟子共有テ、歎キ悲テ旁ニ祈禱スト云ヘドモ、更ニ其験無し（『新編日本古典文学全集』）」とあり、仏教の祈りで効果がなかったものが、「公私」とともにから重んじられてきた晴明を登場させ、結果として師の病を受けた弟子が泰山府君の憐れみによって命が助かってい

る。このことは陰陽道の優位性を意味しており、武田比呂男氏が、当該説話を指して「呪術の競合、術くらべの説話」と言われているのはこの裏付けであると言えよう¹²。泰山府君は、清明から始まる安倍家の陰陽道にとつて、重要な神として祭られてきた神格であつた¹³。そのため、『今昔』で描かれたこの説話は清明自身、もしくはその法に重点を置く説話であつたと位置付けることができる。

ところで注意しなければならないのが、泰山府君祭というものが本来身代わりを必要とするものではないという点である。『続日本紀』において、桓武天皇が冬至の日に行つた祭祀の例として「十一月甲寅、祀天神於交野。其祭文曰、維延暦六年歲次三丁卯十一月庚戌朔甲寅、嗣天子臣、謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩。敢昭告于昊天上帝。(中略)敬采燔祀之義、祇脩報德之典潔誠。謹以玉帛・犧齊・粢盛庶品、備茲禋燎、祇薦潔誠」(『新日本古典文学大系』)とあり、これが泰山府君祭祀の最初の例とされている。ここでの「燔祀之義」「犧齊」とは生贄をささげて天を祀る儀式であるが、これがすなわち身代わりにあたると言うことはできないだろう。また、『吾妻鏡』嘉禎元年十二月二十日にも「於御所南庭被行七座泰山府君祭」と泰山府君祭の記述が残っているが、鎌倉時代以降、祭祀を行う原因として病からの快癒祈禱、天変地異のための鎮霊等の例は見当たるものの、その代わりとしての身代わりや祭具として生ける人間が使われたという例は見当たらない¹⁴。

また、泰山府君という神が、古く不動明王に近い役割を持っていたことも注目すべき点である。いかにして陰陽道信仰を中心とする泰山

府君から不動明王へと主題が入れ替わっていったのだろうか。その理由を明らかにするためには、三井寺内部に残る史料を精査をする必要がある。

以下は園城寺関係の雑録である『雑談鈔』一一「泣不動ノ縁起ノ事」と題される部分の一部である。

日王菟寺倫与内供智興内供事也。日王菟寺之儀荒説也。或説云智興忽受重病云云。忽受重病。時行病也。欲入講飲用頭清明令占存否。清明占云。必死。定業也。仏神之加力於今者難叶歟。但奉命有申奉替之輩者、祈試候申。……(中略)……仍清明証空令臥彼内供傍、府印、読条文。其時内供忽病患除散、証空忽面赤況病延。爰清明申云。今ハ不レ及沙汰。早証空可出門外。云云于時証空病中微声申云。今一度最後奉拜見本尊。云云仍彼本尊前昇将行。即証空忽向本尊、亦合掌祈念。此時空中唱云。汝者替師。我ハ替汝ト云聲聞。傍人々聞之。則本尊絵像也。証空之頭落懸。此時証空忽病患消除氣力如本也。爰証空住本心、静奉拜見本尊之處、血淚自左右御眼流下。靈驗殊勝事也。

此儀不分明、至後醍醐院御代、其像在之。元弘以後不知伝来之故。云云

件霊像於慶勝阿闍梨^(マ)鳥羽之宿房焼失了。既及三卅年。実為門跡大憂悲也。(傍線筆者、旧字体は適宜新字体に改めた)

この『雑談鈔』を翻刻された梁瀬一雄氏によると、「後の『寺門高僧記』『園城寺伝記』『寺門伝記補録』と相補うべき性格のものであ

り、成立年代の詳細は不明ではあるものの、一二世紀、一一六五年より五十年は下らないだろう」と述べられる。¹⁵そのためこれらにより中世期に伝わる泣不動説話の展開の一形態や、三井寺の内部における伝播の実相を見ることができるといえる。

こうした三井寺の〈内〉のテキストと〈外〉のテキストとを二系統に分類し、対比的に俯瞰してみると、まず注目されるのが三井寺の〈外〉のテキストで描かれる証空の「すぎる姿」の描写である。『宝物集』七巻本には「今生の命は師にかはる。ねがはくは、明王、臨終正念にしてころし給へ」と自らの修行の不足を師に代わって命を差し出すことで救いを求め、不動に対し死を願おうとする姿が特徴的に描き出されている。¹⁶絵巻としての『不動利益縁起』もこれに倣う。さらに『発心集』の「勤め少なければ、後世きはめて恐し。願はくは、明王あはれみを垂れて、悪道におとし給ふな」というものや、その『発心集』に倣う『三国伝記』の「兼ねて行業なければ後世きわめておそろし。願わくは大聖明王あわれをなして悪道に落とし給うべからず」という態度には、不動に助けを請う姿が見える。

こうした「すぎる姿」は、記述された物語の主体が誰なのかという点で大きな意味を持つことになる。〈内〉なるテキストに高僧として描かれる証空にはこうした「すぎる姿」は描かれず、本尊を必死に念じたことのみが描かれる。三井寺周辺で残される史料、『雑談鈔』『園城寺伝記』および『寺門伝記補録』、また〈外〉のものではあるが高僧伝としての『元亨釈書』には見えず、あくまで高僧としての証空像が描かれているに過ぎない。さらに言えば先述した『発心集』などの

描写に対して、三井寺関係の書については証空の言葉はなく、あくまでも三井寺の高僧である証空が、不動靈驗のために命を救われたという事になっている。つまり〈外〉なるテキストで語られたものは、証空を巧妙に目立たなくさせ、一方で不動の利益を前面に押し出している。こうしたことがテキスト上で実に印象的に描かれているといえるよう。

このように「すぎる姿」というものは、端を発する『今昔』など晴明による陰陽説話であったものから、三井寺で発生した泣不動靈驗譚へと展開し、いつしか不動の姿を大きく描くことにつながる。それと同時に証空の存在を矮小化させることにより、不動利益を中心とした靈驗譚として構成されていく過程に生まれたと言えるのではないか。しかし、それはあくまでも三井寺とは一線を画した「場」で起こったと予想され、〈内〉で展開された説話においては、幾度も焼失を重ねては復興する三井寺の歴史的背景があったとしても、根本的に証空を名高い高僧として中心に描きつつ、一方ではそれに付随するものとして不動靈驗による効験を語っていたのではないか。すなわち、これはただ三井寺の〈内〉〈外〉という「場」の意識だけではなく、その用途や目的に応じて作りかえられていることになる。このように考えたとき、三井寺は何らかの形で、すでに円珍の不動靈驗などにより浸透していた自社の不動信仰のため、泣不動説話というものを利用していただのではないかと考えられる。また、こうしたことから中世期以降他寺院との関連とも結びつけられる信仰の構造があるのではないかと考えられるところである。

四 三井寺在地信仰の展開——不動信仰から地蔵への信仰

三井寺は『今昔』の所収話から、不動信仰の基盤として成立する泣不動説話へと展開させていった。それらが直接的関与をもとに一つの不動霊験へと収まっていたとは言えないが、歴史的見地であつての三井寺内部の事情を踏まえたとき、天台本山としての信仰の場であるのとは別に、不動を本に据え、これをまとめていこうとする意識があつたと想像しうる。鎌倉期には多くの不動明王が三井寺に寄進され、平安時代後期、智証大師円珍が感得した黄不動像をもとに成立したとされる曼殊院蔵の「不動明王像」など、多くの模写の存在やそれらの広がり、こうした複数系統の信仰が存在したことを物語る。

また、三井寺は不動信仰に加え、修験道の場として、また西国三十三所札所として観音の霊場としても著名になり、独自の発展をするに至る¹⁷。加えて中世に入るところからは地蔵への信仰も活発化する。三井寺周辺の在地信仰において、そうした根本となる信仰の上に、地蔵と結びつきが強い地獄の思想が取り入れられるということは、泰山府君信仰が既にある程度根付いていたことが十分想定される。在地においては様々な本尊への信仰が複雑に入り組んでいたのである。当時の不動と地蔵の位置については、蘇生に関連する興味深い例として『撰集抄』に、

恵心僧都の稲生とに、安容の尼といふ人侍りけり。年比あさからず思ひけるあるじにおくれ給ひて、さがてさまかへ、小野といふ山里に籠りゐて、地蔵菩薩を本尊として、明暮行ひ給へり。或

時、夜ふくるまで心を澄まして勤うちし、「かならず後生助けさせ給へ」と祈り申されて、いちいね給ひ侍りけるに、夢に此地蔵菩薩おはしまして、「いかにもたすけんずるぞ。それについても、つとむることを物憂くすな」と被仰と思ひて、夢さめ侍りけり。……つひにはかなく成りぬ。僧都待ちえていそぎ見給ふに、はやこときれにけり。あさましとも、心うしともいふ斗なし。なほもしやと覚えて、修学院の勝算僧正の庵室に、死せる人をかきいれさせ、僧正に、「加持して与へ給へ」とあれば、「大きにかたき事に侍り。」さりながら、不動の呪をみて給ふ。僧都又地蔵を念じ給へりけるに、数十反にみたざるに、尼いき返り侍りて、かたりけるは、「不動地蔵の我が二つの手を引きて、冥途より返し給ひしに侍り。」とぞ申されける。¹⁸

(傍線筆者)

と記述されるように、普段地蔵を念じていた安養尼が亡くなった際、「不動の呪をみて給ふ」などと不動の呪を唱え、地蔵を念じること、結果として地蔵と不動に手をひかれてこの世に戻ってくる。後代『地蔵菩薩霊験記』にも採られる本話であるが、このような不動と地蔵の関係について、修験の人々と密接な関係をもった地蔵に対し、三井寺の修験の組織化が進む中、地蔵と融合させつつも不動尊を前面に押し出してきた者の存在を窺い知ることができる¹⁹。熊野支配もあり、修験道と密接な関係にあった三井寺が、次第にそれと関係の深かった地蔵と対抗させるという形で、延命蘇生の利益を持つ不動を表舞台へと出していくことは、信仰の伝播という問題からも重要な役割を担っていたと考えられる。

ところで、この不動と地蔵の関係について、『撰集抄』の内容も含め、中世以降作品内で一組として描かれることがある。²⁰六道輪廻と地蔵は関わりが深く、また中世半ば以降に発展してくる民俗信仰のひとつである十三仏信仰では、五七日の閻魔王の本地仏が地蔵であり、救いを施す功德があるなど、その慈悲深い様相とは異にして、殊に六道および地獄との関係性が深い。そもそも地蔵や現世救済を期待する観音などに対して、涙を流す不動や手を繋ぐ不動というものは、憤怒相で表現される一般的なイメージとの隔たりが強く、民衆にとつての信仰に繋がる強力な一要素として存在していたと考える。同時に、閻魔の本地などと表される地蔵の存在も垣間見えてくる。²¹

三井寺に存する仏像の状況を見ると、室町時代には延文元年、足利尊氏が没した際に、幕府が地蔵尊を三井寺に奉納しており、さらに続いて二代義詮が没した貞治六年にも三代将軍義満が同じく地蔵を三井寺に奉納している。また、一四―一五世紀にかけては現在金堂に安置される木造地蔵菩薩坐像二体や木造地蔵菩薩坐像（大津市観音寺町自治会保存）などが三井寺にあったとされる。相次いで不動明王を中心とする像が作られ寄進された鎌倉期までに比べ、室町期において三井寺では、本格的な地蔵信仰の流行が到来したことが確認されるのである。

説話の地蔵については、『今昔』と『地蔵菩薩靈験記』との関係について既に多くの研究がある。その中で最も注目すべきことは、高橋貢氏が指摘されている『今昔』巻一七の地蔵菩薩靈験譚について、大部分が三井寺上座実睿の『地蔵菩薩靈験記』を典拠にしたと考えられ

ているところである。²²古くから三井寺と地蔵との関係性は深淵だったと考えられ、実際に『園城寺伝記』でも、「地蔵者清浄観之出家名也。地蔵者天下萬種覆無端。地蔵萬像載無棄。故號地蔵。」という地蔵の記述も散見する。こうした天台密教、また浄土教寺院と地蔵との関わりについては、源信との関連も指摘されることがあるが、それと同時に、地蔵信仰は泰山府君信仰の一形態として受容されていく。

また地蔵と地獄の関係を裏付けるように平安末期頃には十王信仰との関係性が築かれてくる。十王信仰とは人が死んだあと、冥界にある十王の宮殿を順々に巡り、生前の善悪による審判を受け、次の転生先が決まるというものである。泰山府君は古代中国の後漢から魏晋時代にかけて泰山が人の魂魄を招き、生命の長短を司るという思想が取り込まれ、仏教の閻魔王の役割に近い神格を持つようになった。古くインドから在地宗教が仏教と相まって中国に伝来するとともに十王信仰の中で閻魔と結びつき、本来は道教世界の冥界王として代表される泰山府君が、いつしか仏教と混交しながら新しい概念を作り上げたのだという。死後の人への没後七日ごとの追善供養は元来儒教の教えとされていた。それが道教の地獄の十王という観念を受容することで十王信仰の基盤が造られていった。日本における信仰として、坂出祥伸氏が「地蔵というものが十王信仰の基盤となった」と述べられるのは十王の本地が付加された十仏信仰のことであろうか。²³いずれにしても、苦難に陥る衆生の救済を願う十仏信仰は中国においては現れず、専ら日本での信仰の発展形と言える。源信が臨終の行儀において衆生に念想を勧めるとき、観音・勢至・普賢・文殊に並ぶ仏として地蔵を取り

入れたということは、ひいては末法近づく世における救済を求めた結果であろう。

最終的に密教思想を取り込んで十三仏信仰へと発展をみる十王信仰だが、泰山府君の思想がこの十王信仰から地獄や閻魔王とも結びつく流れがあったとすると、そうした信仰変容の波が三井寺にも押し寄せていたと解釈できよう。これら信仰の様子について泣不動説話の展開の一形態として知られる『真言伝』証空段には「此事世ノ人委ク知ルニ依テコマカニシルサス」と記載がある。²⁴このことから泰山府君を中心とした『今昔』に描かれた世界は、広く三井寺周辺でも在地の信仰として存在していたのではないかと考えられる。つまり天台寺門の大寺院として名を馳せる三井寺は、智証大師の不動信仰をも基盤として、異なる二系列の信仰が内部で発生し、そこに泰山府君と諸相の似通った不動明王を仏教的に取り入れた。そして泣不動説話を『雑談鈔』のごとく三井寺が独自に自社の霊験譚とし、発展させていったという過程が見えてくる。当代の思想に背負われるように、泰山府君や不動霊験は容易に受容されていたと考えられ、『真言伝』の記述等からも見られるように、これらがいかに一般的に浸透していたかというところをも確認できる。三井寺周辺という「場」において、複数の信仰形態が複雑に入り組み、高僧たちの表現方法によっても内容が大きく様変わりしながら、それに付随する霊験譚も恣意的かつ合理的に変容されていくのである。

おわりに

以上のように、泣不動説話の研究動向を捉えつつ三井寺〈内〉〈外〉のテキストに目を向けるとともに、三井寺周辺における在地信仰の発展の可能性を指摘した。本稿では扱うことができないが、泣不動説話類の中でも特異な発展をしているのが絵巻である。

中世期には泣不動説話が絵巻となって、視覚的に人々の知るところとなる。現在泣不動関連の絵巻としては、泣不動を伝える最古のものとされる鎌倉期の『不動利益縁起』（東京国立博物館蔵）や、これに倣ったものとされる室町期の『泣不動縁起』（清浄華院蔵）が伝わる。清浄華院本には詞書きが存在しないが、絵については『不動利益縁起』とほぼ差違はない。これらは一見『発心集』さながらの展開に思われるが、絵巻には従来存在しなかった描写である「証空の身代わりとなった不動は命を落とし縄を打たれて地獄に赴く」「捕らえられた不動が閻魔の御前に連れてこられるが、閻魔はその様子に驚き呆れて平身低頭する。」「解放された不動が最後には悠々と元の世界へ戻っていく。」という、いわば「不動の地獄連行譚」ともいえる話が付加部分として追加されているところに特徴がある。縁起絵巻になってからの追加要素は、不動明王としての威厳をより鮮明に描く一方、証空をより脇役にさせるとともに、不動が涙を流し、そして身代わりとなったという利益自体の印象を薄くさせてしまう作用がある。このような絵巻の作成、またその根源となる物語は本来霊験譚を語る三井寺内部ではない「場」で作成されたことは容易に想像でき、あくまで

庶民レベルにおいてこうした靈驗譚が伝わっていたと考えられる。これらは先述した地獄への意識や諸信仰を基盤として成り立っているといえよう。

浄土宗寺院として名を成す清浄華院の寺宝を記述した文書である『参議藤原頼業筆浄華院由来書』には、永享年間に、既に円珍が書いた泣不動縁起が存在しているとの記載がある。その靈宝を見る限り、天台関係の靈宝が多いことにも気付かされるが、泣不動縁起が主に三井寺内部で語られた内容に大きく添加されたものであるのに対し、その変容に寺院が全く反応しないことに対して非常に奇妙な印象を持つ。こうしたテキストから関連性を読み解くとき、今後こうした絵巻の流布と両寺院間の問題にも着目する必要がある。

仏菩薩の身代わり靈驗譚の中でも不動の靈驗譚は特異である。忿怒に満ちたその顔から涙を出すという様相は、不動自体が元来持つ印象との違いゆえに、受容者たちの心に、より鮮明に刻まれたであろう。

大きく二系統に分類される泣不動説話は、証空の「すがる姿」などの描写により、靈驗譚の主題を適宜変化させて巷間へと広がっていたことが考えられる。不動の靈驗が語られるとき、本来泰山府君であったものが不動の靈驗へと変容され、三井寺内部においては証空という高僧や不動明王を配置し、靈驗が語られることになる。泰山府君を頂点に据え、陰陽道の効果絶大なる説話から流れ始めた泣不動説話は、時代を追うにつれ、三井寺の確固たる不動縁起として地位を獲得していったといえる。

元来不動信仰の基盤の上に成り立っていた三井寺には、既に様々な

信仰が意識されていた。泣不動説話は三井寺の〈内〉〈外〉という問題からさらに、靈驗譚が用いられる書物の用途により記述の方法が異なるなど、話題の重心を適宜変化させていったことになる。そしてそれは、泣不動説話からさらに、作品そのものやその縁起を保有する寺院の立ち位置すら変えてしまう重要な問題に繋がってくるのである。

〔注〕

(1) こうした「身代わり」をテーマとする作品は枚挙に暇がないが、例えば『源平盛衰記』に登場する袈裟御前が盛遠に代わり、夫である左衛門尉に殺されるという著名な逸話には、身代わりとなって死んだ袈裟御前について「この女房は観音、優婆夷の身を現じて我等が道心を催し給ふと観ずべし」と記述される。現世利益を司る観音が身代わりとなるという中世期の人々の意識は注目すべきものであろう。

(2) 中世期の泣不動説話の展開については阿部泰一郎氏が『とはすがたり』における再文脈化という問題点とともに再検討されている。またここでは後述の『不動利益縁起』の拠り所として正和三（一三二四）年に成立したクリーブランド美術館蔵『融通念仏縁起』が存在することを指摘する（『とはすがたり』における泣不動説話の再文脈化）（『国語と国文学』九二―五・東京大学国語国文学会・二〇一五年五月）。

(3) 『発心集』の泣不動説話については木下華子氏が先行研究や伝本間の異同を中心にした位相を指摘されている。（木下華子氏『発心集』の泣不動説話）（『清心国文』一六号・ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会・二〇一四年九月）。なお、『発心集』八巻本には巻六の巻頭話として記載されている泣不動説話が、神宮文庫本にも巻三―一話として収録されているが、ここでは内容、文字レベルにおいても同一である。

(4) 梁瀬一雄氏『泣不動』の説話」（梁瀬一雄『説話文学研究』所収・一九八四年）

(5) 南里みち子氏「泣不動の説話の成立と展開」(『今井源衛教授退官記念文学論叢』・九州大学文学部・一九八二年)。この論文において、「泣不動の説話について、その展開のあとをたどって見たわけであるが、説話の興味の中心をなしていたのは、不動の発した言葉であったように思われる。それに加えて、証空の心情、証空の母親との会話の部分を中心に、伝承者による潤色のあとが認められる。泣不動の説話は、陰陽師によって伝承されたと思われる身代りの説話を相承するものであって、寺門系僧侶の陰陽道的活動のもとに成立したものとと思われる。より具体的にいうならば、おそらく泣不動の絵像とその霊験説話を管理しつつ、呪術的な宗教活動に携わる集団が存在したのではないかと考えられる。」と三井寺内部の陰陽師さんからの呪術活動をしていた僧集団の存在を示唆されている。

(6) 中前正志氏「不動の涙——泣不動説話微考」(『国語国文』七四〇号・京都大学文学部・一九九五年一月) および「不動の涙——崩れた霊験の証し」(『神仏霊験譚の息吹き——身代わり説話を中心に——』・臨川書店・二〇一一年)。現在の泣不動説話の成立および展開論は南里氏、中前氏両論において見通しが明るくなった。

(7) 後白河天皇は大治二(一一二七)年に生まれ、建久三(一一九二)年に没する。一方覚助は『日本人名辞典』によれば長和二(一〇二三)年に生まれ、近江園城寺で行円・心誓に密教を学び、同寺花王院主となり、康平六(一〇六三)年一月一日死去したとされる。よって両者の時代には約百年の差がある。

(8) 空也上人の臂の折れた話については、築瀬氏が前掲論文において詳しく論ぜられる。『撰集抄』では余慶が、西国巡礼を行ったとされる行尊になつてゐるなど、僧自身が入れ替わつてゐる点から、おのおのの僧の年齢を推定されている。存命する証空の母などを考慮し、泣不動関連の事件が「智興の老年期に於ける事件とする方が、やゝ有力に見える」という推論をされ、これにより各説話の矛盾点を指摘される。

また、南里氏は前掲論文において、『発心集』に記される白河院に伝えられたという話から、「おそらく不動の持者証空の霊験が宣伝され

る過程において、それを智証大師の主流を伝える余慶と結びつけようとする意識がはたらいたものであらう。」と述べられる。

(9) 前掲築瀬氏論文「『泣不動』の説話」

(10) 前掲南里氏論文「泣不動の説話の成立と展開」

(11) 坂出祥伸氏は「日本文化の中の道教——泰山府君信仰を中心に——」(『中村璋八博士古稀記念 東洋学論集』所収・汲古書院・一九九六年)の中で中国泰山の信仰について精緻な論を提示される。それによると中国においてこの泰山に対する信仰と結びついて表記されるようになり、道教では東嶽大帝とも呼ばれていた。『搜神記』や『莊子』などに記されることから、泰山は死者の霊魂が集まる霊地という印象が強いのだという。中国にはこうした霊山としての存在を表す説話は多く残っており、例えば陝西省華山に残る説話にも華山が魂の集まる霊地としての姿を記載している。

(12) 武田比呂男氏「〈安倍晴明〉説話の生成」(『安倍晴明』の文化学 陰陽道をめぐる冒険』・新紀元社・二〇〇二年)

(13) 泰山府君や陰陽道の関連の詳細については斎藤英喜氏「冥府と現世を支配する神」(『陰陽道の神々』所収・思文閣出版・二〇〇七年)に詳しい。

(14) 本文は『寛永版印影吾妻鏡』(汲古書院・一九七六)による。『吾妻鏡』における泰山府君祭の例としては、鈴木許恵氏「絵馬の信仰研究——泰山府君祭をめぐる——」(『千里山文学論集』第六三号・関西大学大学院文学研究科・二〇〇〇年三月)における表を参考にさせていた。

(15) 築瀬一雄「碧冲洞叢書」第七冊より『雑談鈔』解題(臨川書店・一九九五年)

(16) 『宝物集』の諸本間についてのテキスト間の詳細な泣不動縁起の異同や対比については、前掲中前氏「不動の涙——泣不動説話微考」に論ぜられる。

(17) 三井寺の修験については、十一世紀初頭増誉が熊野三山検校に任ぜられたことで、本格的な寺門の熊野修験支配が始まってくる。大験者と

して一乗寺僧であった増誉と、三室戸寺の隆明は当代を絶するものであったと言われている。思えば、三室戸寺も西国三十三所寺院であり、観音信仰などが根付いていた大寺院として、それまでに寺門修験の活躍というものがあつたのであろう。修験道の広まりとともに、観音の名声も知れ渡り、徐々に観音霊場としての姿が顕れていく。

- (18) 『撰集抄』 卷九安養尼事。本文については小島孝之氏・浅見和彦氏『撰集抄』（桜楓社・一九八五年）による。

- (19) これら不動と地藏にまつわる三井寺の関係性については、田中久夫氏『不動尊信仰の伝播者の問題』（田中久夫氏『民衆宗教史叢書 不動信仰』・雄山閣出版・一九九三年）にも指摘がある。

- (20) 近世期元禄四年、北条団水の手による『団袋』中「両吟」には、半歌仙中の七、八句目に、「すゝどきは不動地藏のうつくしき（団水）」「蘇生して何はなすらん（西鵬）」という句が存在する。これに対するそれぞれの評として『類船集』において「地藏―六道」、さらに発想として「六道―蘇生」の関係性が指摘されている。これは水谷隆之氏『団袋』の西鶴――団水との両吟半歌仙について――（『国語と国文学』第八十六巻七号・東京大学国語国文学会・二〇〇九年七月）に詳しい。水谷氏は「蘇生」した人が「はなす」内容をきっかけに動き出すさまざまな人間模様は、西鶴の浮世草子において多々描かれたところである。」と述べられており、近世期においても一度死亡した人間が再び何らかの仏の功德により蘇る諸相は数多いとされる。本論でもやや触れたが、忿怒の形相で悪魔や煩惱を降伏させる役割を基本とする「不動」と救われることを前提としている「地藏」という二つの仏には念じる者においても意識が変わってくる。『撰集抄』における手をつなぐ不動と、泣不動説話における不動は、団水の詠む「すゝどき」不動とはまた一線を画す非常に奇怪なものである。

- (21) 未確認であるが、中世期には忿怒相以外の不動明王像などが存在するという。団水の言う「うつくしき不動」なるものの存在とともに興味深い。

- (22) 高橋貢氏『地蔵菩薩靈験記』成立の一背景（『民衆宗教史叢書 地

蔵信仰』所収・雄山閣出版・一九八三年）

- (23) 前掲 坂出祥伸氏「日本文化の中の道教――泰山府君信仰を中心に――」、また『日本と道教文化』（角川書店・二〇一四年）も参照した。

- (24) 『対校真言伝』（勉誠社・一九八八年）

〔参考文献〕

本文に際しては特に記載のない限り『新日本古典文学大系』『新編日本古典文学全集』を使用した。

（たかくら みずほ 文学研究科国文学専攻博士後期課程／満期退学）

（指導教員・黒田 彰 教授）
二〇二〇年九月二十九日受理